

希望

岡本俊弥

少年は三歳のとき、適正試験を受けた。それは自分の過去と将来を考えると
いうもので、試験官から口頭で説明を受けて行うものだ。

「ちよつと前のこと、きのうでも、おとついでも、去年のことでもいいから、思い出
せることを答えてください」

幼い少年は、特に疑問を抱かずにお話をした。家族と遊園地に行つて楽しかつたこ
と、ただ、どこで、何時あつたのかは言えなかつた。実際のところ、ほんの数か月前
のことだった。

「それじゃ、未来のことを考えてみましょう。きみは明日でも、あさつても、一年
後でもいい。何をしてるだろう」

少年は悪の軍団のことを口にした。自分はヒーローになって、地球を滅ぼす敵と戦うのだなどと話した。雑な子ども向けドラマの、あらすじを受け売りだった。

将来を空想するのは、三歳児には難しい。ごく近い明日、明後日くらいがせいぜいだ。それでも三歳未満ではまったく無理なのだという。ちょうどゼロから有限になる分岐点で試験を受けたのだ。

十代になれば、未来はずっと遠くまで拓けてくる。一年後、五年後、十年後と遠い明日が見えるようになる。未来になるほど将来は楽観的に思える。いまより明るく、すばらしい明日。今日できないことでも、遠い明日ならできるようになる。そう錯覚する。

六月一日、出発の日が来た。

朝早くからの集合のため、少年はふだん通らない道を下って国有鉄道のT駅前まで歩いてきた。

空は曇っていたし、気分はさらに晴れない。

集団行動が嫌なのだ。一日中教師の指図に従うと思うとげんなりする。休みたかったが、もちろんできるわけがなかった。

ただその一方で、もやもやとした期待もある。

一年生のとき知り合った少女と、再会できるかもしれないのだ。

中等学校に上がったばかりのころ、学校間の交流を兼ねた広域オリエンテーションの場で、少年は同じグループの少女と妙に気が合った。身長や痩せた体形も同じで、お互い異性をあまり意識しない年齢だったせいもあるだろう。

すっきりとしたきれいな声で、どんなことにも自分の意見を述べるようなタイプ。強引でも嫌味がなく、とてもさわやかな印象。リーダー型で、どう考えても少年とは違う性格だが、だからこそ魅かれたのかもしれない。

学校は別だった。隣の学区なのだが、スポーツ交流のような行事でもないかぎり、他校生と出会う機会はめったにない。少年は運動系のクラブには属していない。

あれから二年が経っている。

中等学校生は、気持ちも体も毎年どんどん変化する。あのときのような無垢な会話

は、もうできないだろう。

それにしても、どんな話をしたかの記憶もなく、いまどうしているのか知りもしないのに、自分が少女と再会したいと思う理由が分からない。

砂利を敷いた駅前広場に、標準服を着た生徒たちが黒々と蝟集している。十四クラス
の男女、七百人あまりになるのだから、狭い広場は混み合う。

少年はマスクを取って、軽く手を挙げる。

「おっす」

「おお、きたか」

同じクラスの眼鏡が応じる。

「きたか、はないだろ」

クラス単位で乗る号車や座席は指定されている。眼鏡とは同じグループだ。むつつ
りと生徒たちを眺めていると、眼鏡はこんなことを小声でささやく。

「たのしみだな」

「ああ」

「あそこにしかないものが見られる。タワーとか議事堂とか」

「その話なら、もう聞き飽きた」

旅行が近づくにつれて、眼鏡は本で読んだ情報を何度も話題にした。図書館にある本では詳しい中身が書かれていない。自分が見たわけでもないのに、固有名詞だけを並べられても、イメージがさっぱり浮かんでこないのだ。少年は退屈するだけだった。

「そうかな」

鼻白んだように眼鏡は黙りこむ。

「どうせ、明日になれば見られる」

「うん、まあな」

整列が済むと、順番にホームに上がっていく。車両基地を兼ねた駅で、無蓋や有蓋の貨物車や操車場が見渡せる。整備のために旅客列車は停まるが、乗降客自体は少ない駅だ。長いプラットホームの大半には屋根がない。

列車が入線してきた。

十二両編成のツートンカラーに塗られた専用列車だ。

近郊通勤用の車両をベースにした新造車だった。三年次の学生たちを大量に移送するために作られたのだ。

運転席のある制御車クハ889が四両、パンタグラフとモーターさらにはディーゼルを持つ電動車モハ882が六両、車輪だけの付随車サハ888が二両からなる。電化区間と非電化区間が混じり合う路線を、ディーゼル発電機を併用しながら走れる最新型の両用型列車なのだ。

これで千二百名が乗れる。

少年は列車旅行ができるほどの家庭環境ではなかった。特急車と見比べたことはないが、この専用車に豪華な設備がないことくらいはわかる。

大人なら窮屈そうな対面固定座席のボックスシートが、狭い通路を挟み六人、四人掛けに分かれて並んでいる。網棚が大きく、鞆を置くスペースはあるようだ。座り心地はそう悪くない。行きは昼間、帰りは夜通し乗ることになる。

専用車はゆっくりと出発する。

次の駅で、隣の学区の五百人が空いている車両に乗ってきた。ホームは少年の席と

は反対側なので、顔を確かめるまでではできなかった。

「なんだよ、知り合いでもいるのか」

落ち着かない様子に、眼鏡が怪訝そうに言ったが、少年は適当にごまかした。

ビルが建つK市の中心街を抜ける。通勤客が並ぶホームを次々と通過する。ノンストップだ。

スモークフォッグが立ちこめた中を、列車はスピードをあげていく。場所によって濃淡があり、靄になったり濃い霧になったりする。

列車の中では特に行事はない。

何をしても良いが、飲み食いだけは自由にできない。間食も含め、食事時間は決められている。それでもふだんとは違う旅行なのだ。抑え気味ながら、車内には話し声があふれている。大声を出すと注意を受ける。

どうでもいいことを話しかけられるのが厭で、少年は窓際に黙って座り、車窓に目をやっていった。

視界が悪く線路の近在しか見えないが、建物がお化けのように霧の中から現れては

消える光景は、独特の浮遊感をともない飽きなかった。

ようやく昼になり弁当を食べ終えたころ、まばらでも続いていた都市部が終わり、列車は何もない原野のただなかを走り始める。ここにも霧が立ちこめている。

遠くに動くものが見えた。

濃淡のある白い流れの中だ。遠近感が不確かなので、大きさがよく分からない。建物ではないだろう。ゆらゆらと動いているからだ。

「おい、あれ」

隣に座る眼鏡に声をかける。

「ええ、なに」

「みえないか、あれあれ」

「あれって」

指し示すと、座席の何人かも窓をのぞき込む。

「なんだ」

「でかいんじゃない」

「なんだ、ありゃ」

「動いているのかな」

距離感がつかめない。遠いのか、だとしたらかなり大きなものだ。霧の濃淡で見え隠れしながら、背の高い、しかし太くはないひよる長い何かがつくりと回転している。上部は靄って隠れている。奇妙なのは、そのあちこちで照明なのか、識別灯なのか、極彩色のランプが光っていることだ。紅、橙、白、青、紫、緑、それらが回転に合わせて瞬いている。いや、列車が動いているのでそう見えただけかも知れない。一瞬霧が薄れると、さらに遠方にも同じものがあるのが分かった。

ゆらゆらと揺れて、ゆっくりと回る。

「へんてこだ」

「ぶきみ」

「こわいな」

少年たちには、それを正確に表現できる語彙がなかった。

見ているうちに列車はカーブにかかり、何かは後方へと消えていった。

「あまり見るな」

いつの間にか横に來た教師が小声で注意する。

「見ていいことはない。無視しろ」

覗いていた数人は、しばらく沈黙する。周りの雑談とは対照的な、おかしな空白だった。他に気がついた者はいないようだった。

東に向かつて、列車は走り続ける。

そこから先、鉄道沿線の多くは無入地帯だった。家の建ち並ぶ都市圏と、その市街地周辺にこそビニールハウスを使った農園があったが、すぐに途切れてしまう。原野にはまばらな木々、雑草に覆われた平らな土地だけがある。人家は全く見えない。

ただ、霧の奥に何かが佇んでいるような気がした。

さっきのひよろ長いでかぶつと、同じかどうかは分からない。

じっと見つめていたが、以降に何かが見つかることはなかった。級友たちもすぐに飽きて、雑談に戻っていった。

うとうとしながら、半覚醒状態のまま流れる風景に目をやっていると、遠くに火が

あらわれた。暗い闇夜に電灯の灯火が一つだけともっている、そういう孤立した火だった。

濃い靄の中で、その厚い層を突き透す炎があるとすると、人工的な灯りではないだろう。

「あれは」

「あれは、火山だよ」

「火口か」

「そうだ。日によって違うけど、海側を通る線路からだに見えるらしい」

長い間休止していた噴火が始まったのは、二十年近く前のことだった。T湾に至る広大な地域に噴石や灰が降り積もった。今では、噴出物も収まっている。少量のガスと蒸気が噴き上がっているだけだという。それでも、S湾の方向に開いた五合目付近の新火口からは、まだ火が見えるのだ。

「霧の原因は、あれなんだ」

眼鏡が言う。

「霧が火山から出てるって意味なのか」

「いや、そのものじゃなくて粉塵のせいだ」

「ふんじん、ちりのことか」

「浮遊する細かい塵に水分が凝集して霧になる」

「日本中だぜ、すごい量になるだろ」

「量よりも、吹き出した塵の細かさが問題だな。空中に滞留してるらしい」

立ちこめる煙霧、スモークフォッグは肺疾患の原因になる。喘息を患う級友も多かった。自然が原因ならどうしようもない。

少年も外出するときはマスクをかける。ガーゼを重ねただけの布で、どれだけ効果があるのか分からないが、親がうるさく促すのだ。

「風で飛ばないのか」

北風が吹く冬の一時期には、晴天になることもあった。

「飛ばされても、火口からいくらでも出てくるからな」

「うっとうしい」

「おれに言うなよ。しょうがないだろ」

オレンジ色の炎に目を凝らすと、その中心に黒々とした何か伸びあがって見えた。火口と同じぐらいの大きさで、火に照らされている。

ひよろ長いでかぶつよりも、遙かに大きいのではないか。少年は考える。何だろう、噴出物の痕か。ここから火口までだと遠すぎるし、黒っぽくてはつきりしない。もしかすると、火口に突き刺さっているのかもしれない。

やがて山が迫り、トンネルに入る頃には視界から流れていった。

陽が傾き始めている。進行方向に当たる東は、もう夕暮れのようにだった。

少年は洗面所に立つ。車両後尾の洗面所を過ぎると、次の車両はもう別の学校の領分だ。少年は様子をうかがい、何気ない顔で扉を開く。

上着を脱いで、校章を隠すようにして通路を歩いていく。男子は同じ詰襟だが、女子は見慣れないセーラー服だ。顔見知りはいない。同じ年頃の中等学校生の中を緊張しながら歩く。少年に注意を払うものは誰もいないようだ。

途中で、少女の顔を見つけた。

クラスの少女たちと談笑している。一瞬目を合わせるが、声を交わすことなく通り過ぎる。

むこうは気が付いただろうか。

少女は二年前より背が伸びて、顔立ちも大人になっていた。

少年は、少し顔を赤らめる。まだ自分は子どもだ、と思ったからだ。

二年の間に、二人の時間は別々に過ぎていた。予想したとおり、きつともう話題は合わないし、話しかけるきっかけもないだろう。

分かっていたのなら、なぜ旅の前になって少女のことを考えたのか。どうどう廻りだ。

少年は苛立たしさを感じながら、次の洗面所で顔を洗い、急ぎ足でまっすぐ席にもどる。

まだ空の明るさが残る時刻に、列車は首都圏S駅のホームに着く。出発してから十時間が過ぎていた。

クラス単位で一列になり、北側の広場に出て、決められた番号の観光バスに乗り込

む。地方から出てくる旅行生は珍しくないのだろう。車掌は手慣れた様子で、なかば機械的に誘導する。バスの台数が少ないのか、補助席も使って身動きが取れないほど押し込められる。宿舎まではさほどかからない。

「旅の日まで、あと一ヵ月となりました。ご父兄のみなさま方におかれましても、何かとご不安を抱かれているやも知れませんか」

父兄を前にして、校長はぎこちない笑顔を浮かべて語り掛ける。いつもなら面白くなさそうな表情を浮かべ、全体朝礼や行事で定型的な挨拶をするだけなのだ。

「しかしながら、これもすでにご理解いただけていると存じ上げますが、この行事は政府により定められました学習指導要領に基づき実施するものでございまして、何のご心配も必要がないものでございます」

軽く咳払いをして続ける。

「すべての中等学校生は三年次に首都に赴き、イニシエーションに参列する義務がございます。そのために、全国の学校は指導日程に合わせて旅程を組み、脱落者なく全

生徒を送り出さねばなりません。イニシエーションに臨んだものだけが義務教育の卒業を許されることは、この場にご臨席のご父兄の方々一人ひとりが、よくご存じのことと思料いたします」

説明会では日程や所持品など、こまごまとした注意が与えられる。儀式の詳細について、具体的な説明はない。今知る必要はないからだ。少年が母親に訊いても答えてはくれないし、夜遅くに帰宅する父親とは口をきく機会もほとんどない。

六月二日朝、少年たちは天井の高い食堂で朝食を摂る。

宿舎となった文化学生会館は古びた建物だった。廊下には丸みを帯びた天井があり、部屋は二〇畳分の畳が敷かれているのだが、もともと和室ではないようだった。漆喰を塗られた壁は分厚く、贅沢な造作だったが傷みが目についた。老朽建築を改装した宿舎なのだろう。古いとはいえ、恵まれている方だと教師は言った。首都圏の宿舎の多くは、増大する来訪者に併せて急に増やされた。ここも、昔の富裕層向けの高級アパートメントを転用したものだだった。

宮城前広場は人で埋まっていた。

昨日の駅前比ではない。さまざまな地方から集まる学生の、黒っぽい標準服が何列も何列も並んでいる。しかし話し声は聞こえない。

「いいか、並んだあと、私語はつつしめ。絶対にしゃべるな」

教師は一人一人に注意を与えた。それも複数の教師が何度も念を押した。ふだんない緊張した様子だった。もともと少年たちは、命じられないときに口を開かないように躡けられてきた。この場で騒ぐものは誰もいないだろう。

目の前に宮城がある。

手前に濠があるが、水は抜かれていて深い空濠となっている。底がどうなっているのか、ここからでは分からない。火山が近いためか、首都のスモークフォッグはよりひどいようだった。

宮城は城があったところらしい。

いま城はない。その代わり巨大なものがそこを占めている。何か背が高いもの、何か横幅のあるもの、しかも植物めいた何かだった。

何本かの太い幹が濠の石垣のすぐ上、地面から直接生えている。それがお互いに絡まり合い、一本の複雑な形状の幹を作っているのだ。ただ、葉や枝が見えない。植物ではなさそうだった。こんな木になるには何百年もかかるだろう。そんなことが可能になるほど時間は経っていないはずだ。しかも、樹木の色合いとはかけ離れた漆黒の幹なのだ。上端は霧に吞まれている。どこまで続くか分からないのだが、雲よりもはるか上まで伸びていそうだった。

「なんだか豆の木みたいだな」

すぐ後ろに立つ眼鏡のつぶやきが聞こえた。

「童話のやつ」

とすると、雲の上まであっても不思議はないな、少年は小さくつぶやきかえす。

〈みなさん〉

声が出た。すぐに声は物理的な音ではないと分かる。耳から聞こえてこないからだ。

頭が中心がざわざわした。振動のような、色彩のような、未体験の感触だった。不思議なことに意味が分かった。

ざわざわざわ。

〈よくおいでいただきました〉

すると、立ち込めていたスモークフォッグが突然消え去り、あたりは見たことがないほど晴れ渡る。

広場は、初夏のまぶしい光に満ちる。

何もかもがくつきりとする。真正面の宮城も、そこから延びる巨大な豆の木も、豆の木の先の、見上げた先にある空も。

空は、空はまるで天井だった。そこには雲の流れる空はなく、真っ白な構造物が覆っているのだ。しかも、とても高いところにある。積乱雲の上端くらいはあるだろう。

見回すと、豆の木が何本も天と繋がっていた。首都圏下の建物群や、遠くのあの火山の形までが明瞭に見渡せた。

屋根なのか、ものすごく大きな屋根なのか。

ざわざわざわ。

〈あなたがたのもとに、わたくしたちがこうりんしてから、すでににじゅうさんねん

がけいかいたしました。あなたがたのgoriyouしんのなかにも、ぎしきをうけいれたかたがおられるでしょう。すべてのひとびとがぎしきをうけ、すべてのひとびとに、けいじがおきるまで、あとほんのわずかです

ざわざわざわ。

へいまから、あなたがたのみらいにたいして、わたくしたちより、おんちようをさずけます。これは、あなたがたのころのなかのものとくみあわさり、さまざまなかたちでけんぎいかします。なにをみるかは、あなたがたしだいです。それがあなたがたの、すばらしきみらいの、きぼうとなることを、おいのりいたします

頭の中に温かいものが満ちていった。気温は上がっていないのに、体温だけが上がっていくような、奇妙な感覚だった。

体が大きな周期で揺れる。

全身を包む水の感触。目を開くと、水のただなかに仰向けに浮かんでいる。唇をなめると塩辛い。海なのだ。

海、海なのか。プールで泳いだことはあるが、こんな海のただなかは知らない。どこなのか。

立ち泳ぎに切り替え、周りを見回す。高い波が見えるばかりで視界が開けない。動くもの、人がいる。波間の向こうで誰かが手を振っている。

泳いでその方向に向かう。海水は少しも冷たくない。まるで水温が感じられないのだ。

「おい」

応答があるが、よく聞き取れない。

顔が見えてきた。あの少女だった。一瞬、足がもつれた。手が触れ合えるほどまで近づく。

「やあ、ひさしぶりだね」

少女の方から声をかけてきた。

泳いでいるとは思えないほど、息が落ち着いていた。波がうねり、少女の胸元まで見える。水着を着ていない。それなのに、何も気にしていないようだった。

少年は自分も裸なのだと気が付いて、少しどぎまぎする。

「や、やあ」

少年は間抜けな答えを返す。

「ここがどこかわかるかな」

少女が訊く。

「あ、いや、海だけど」

「そんなこと、わかってる」

まっすぐに片腕を突きだし、指先を振る。

「きみとボクとを合わせるとの海なのさ」

何のこと、少年の頭の中は混乱する。

少女は男の子のような口調でしゃべりはじめる。

「きみは知らないだろ。中等学校の三年次になると、将来のパートナーが割り当てられる。といっても、人で決めるんじゃない。必須となる遺伝子情報のセットで決められる」

「え、え」

「きみは知らないだろ。人類はもともと、アフリカ出自のたった一万人の祖先が拡散と膨張を繰り返して、今の人口まで膨れ上がった。生命はこれまでの歴史で、何度も大きな篩をかけてきた。そのたびにたくさん命が消えた。人類は増えすぎた。ぼやぼやしていられない、もうすぐ次の篩がかかる」

少女の言葉づかいは、大人の演説のようで小難しかった。何が言いたいのか、よく分からなかった。

「ふるいってなんだ。かけるってだれが」

「篩は、必要なものだけを選別する道具。誰がって、豆の木があったら。豆の木の
上、天上にいる」

「そんなわけが」

「あるのさ。だから、きみは幸せだ。きみはボクと出会うことで、明るい未来が約束される」

「待ってくれ、きみと出会ってどうなるって」

「ボクのパートナーになる」

「いや、意味が……」

「きみはまだ子どもだな。まあ、そのうち分かる」

馬鹿にした口調に少し腹を立てるが、少女の口から出る声は心地よかった。何を言われても、ずっと聞いていたかった。

大きな波が来る。頭から呑み込まれる。視野が揺れ、暗転する。どこか奈落に頭から落ちていくような、気持ちの悪い浮遊感覚が伴う。どうしたのか、溺れたのか。すると、いつの間にか上下が逆転している。

海ではなかった。明るい部屋の中だ。扉も窓も閉められている。中等学校の教室だった。机やいすはすべて撤去されていて、ささくれた板の床がむき出しになっている。正面には黒板がある。

「目が醒めたか」

「あ、あ」

体を動かそうとして、椅子に縛り付けられていることに気が付く。

「あ、ああ」

「逃げられやしないぜ。おとなしくしておけ」

肩を怒らせた大男が、少年の前に立っていた。窓を背にしているので顔が見えない。窓の外は見たことのないほどの青空だ。真昼のようだった。少年の腕は椅子の背に、足は椅子の脚部にロープか何かで固定されている。まったく動けない。

「あの、これはどういう」

急に頬を平手で叩かれる。生暖かいものがこぼれ落ちる。鼻血だ。少年は殴られた経験がない。激しく動揺する。

「ひ、ひひ」

怒鳴りつけられる。

「口を開くな。黙ってる」

少年が怯み、男はもう一度掌を構える。とそのとき、部屋の引き戸が開いた。からからと戸車が回る音がする。

来訪者が見えたのか、大男が慌てたように頭を深々と下げる。

「お嬢さま、このようなところに来られましたは」

「おまえは、もう下がってよし」

聞き覚えのある声だった。

大男は頭を下げたまま、無言で退室する。

代わって少女が入ってくる。少女はきらきら光るグレーの燕尾服を着て、すらりと伸びる足を見せつけるような網タイツを穿いていた。真っ赤なヒール、口紅の引かれた赤い唇で、こちらに向かって微笑む。

「お疲れね」

少年は啞然とする。

「ど、どういうこと」

「きみは捕まったのよ。ここは悪の巣窟、きみは能力に目覚める前の正義の味方」

「せ、せいぎ」

少女は腰に差した大きなナイフを片手で抜く。少年の背後に回ると、固く結ばれたロープを一瞬で断ち切る。ためらいがなく手慣れているようだった。

「これで立てるわね」

そういうと、また一瞬でナイフを鞘に戻す。

腕を振りながら、少年は立ち上がろうとする。足も痺れていて、真っ直ぐ立てずにふらついた。

「しゃきつとなさい」

「あっ、はい」

少年は気圧されて、背筋を伸ばす。思わず声が裏がえる。

「ところで、きみは二十三年前に何があったのか知ってる？」

「はい」

政府ができた年だ。毎年記念行事があるので、少年でなくても誰もが知っている。

「では、その前に何があったか知ってるか」

「まえ、そのまえ」

二十三年前、まだ少年は生まれていない。生まれたときからいまの政府があり、いまの社会ができていた。中等学校では歴史を学ぶ教科がない。もしかすると、書かれ

た書物があるのかも知れないが、少年は読んだことがない。

「そのむかし、いまの政府ができる前、この国は悪の組織に支配されていた。国民は飢え、住むところもなく、貧困と絶望のなかに苦しんでいた。そこに、正義が天より表れ出でる。正義は長い悪との戦いにより、悪を撃ち滅ぼし、新しい政府を作った」
「そうなのか」

この口調は、海のただ中で聴いた少女の演説と似ていた。何か決まったセリフのようだったが、少女の声は少年に心地よかった。いつまでも続けて欲しかった。

「そうだ。しかし、悪は死んだわけではない。まだどこかにいる。だからきみは世界の平和を守るために、悪と戦うヒーローになるのだ」

そう言うと、少女はどこに隠していたのか、金色のマントを少年の目の前で広げる。

「子どものきみには、もっと分かりやすい説明をしよう。きみはもっと小さなころ、ヒーローになると誓っただろう。その希望がいま叶えられる。このマントを羽織れば、きみには無敵の力と空を飛ぶ能力とが授けられる」

少女は少年の肩にマントをかける。マントは吸い付くように体に張り付く。

しかし少年が体感したのは無限の力などではなく、少女の体のぬくもりだった。

冷たい空気が頬をなぞる。

気が付くと、列のなかに立っている。周りの生徒たちも、順番に覚醒しているようだ。霧が満ちた広場の様子は変わらない。

何があったのか、何か重要なことが起こった気がするが、驚いたことに何も覚えていない。空の明るさやあたりの様子は朝のままだ。夢を見るほど時間は経っていないようだった。

教師が番号の書かれた旗を上げる。順番に広場から観光バスへと移っていく。一つの学校行事が終わっただけなのだ。

そのあと、少年たちは導かれるまま議事堂を見学する。内部は入れず、外から見るだけだ。石造りの屋根を突き破って、巨大な豆の木が伸びあがっていた。少年たちはその側で記念撮影をする。次にタワーを見た。タワーはそこに生えた豆の木の幹に、鉄骨を打ち付けた塔だ。首都圏でいちばん高い百五十メートル地点にある展望室から

でも、霧に沈む首都圏が垣間見えるだけだった。

夕刻に、バスは再びS駅に戻る。

新政府がどこからきたのか、詳細を知る者はいない。

戦争があったはずだが、その痕跡はどこにも残されていない。両親の世代、当時生きていた人々の記憶は欠落している。消すというより、いまの日常に上書きされている。新政府が樹立されてから、すぐにスモークフォッグが国中を蔽うようになった。新政府の成立と同時に起こった、火山噴火が原因だとされる。そのため耕作地の多くが農業に適さなくなった。国土の九割の土地は放棄され、多くの地方在住者が都市圏に殺到した。都会にいと感ぜないが、この二十年の間に人口は減少したらしい。自然減にしては早すぎる。たしかに出生は減った。政府がコントロールしている、という噂もある。選ばれた者だけが子孫を持てるらしい。

大変動に備えているとしても、変動を企図するのは政府ではないか。

いや、そもそも政府とは何だろうか。あの豆の木の上に住んでいる「もの」たちが

支配者なのか。天地を自在に結ぶ力があるのなら、スモークフォッグなど簡単に除去できそうなものだ。それとも……。

けれど、旅行の間、少年にはそんな不穏な考えは浮かびもしない。少年が大人の疑問を抱くのは、まだずっと先のことだ。

浮かれた夢の内容も、意識の下に埋もれる。

ただ、少女のことだけは、水槽の泡のように浮かんでくる。波間に揺れる裸体、網タイツの脚、赤い唇。妙にエロチックだが、自分でも妄想だとわかる。でたらめな組み合わせではないか。しかし、心に浮かぶたびに、少年は胸騒ぎをおぼえる。

列車の窓外はすぐに暮れて、何も見えなくなる。

生徒たちは疲れたのか、行きの車中のような元気がない。言葉も少なく、椅子にぐったりと坐り込んでいる。夕食が終わると、居眠りする生徒が増える。列車がレールの継ぎ目を経る音だけが車内に響く。

少年は、夜が更けたところに目が醒める。

ふたたび隣の車両まで、通路を歩く。ここもみんな寝静まっている。硬い椅子の上で、寝苦しそうな姿勢で眼を閉じている。小さなびきも聞こえた。

少女がいた。

少し寒いのか、体を縮めて眠っている。大人びた寝顔だった。少年は何を思ったのか、手にした上着をそっと少女にかける。マントをかけたみたいだ、と思うが、なぜそんなことを連想したのかは分からない。

小走りに自分の車両までもどる。

六月三日の早朝、列車は出発したT駅に帰着する。